

美術部へようこそ! ●兵庫県南あわじ市立南淡中学校

兵庫県淡路島の最南端に位置する南淡中学校の美術部。
地域に新しい「インスタ映え」スポットを生み出した、
シャッターアートの取り組みをご紹介します。

長さ17mに及ぶ大画面

2.5×2.2mのシャッター8枚をキャンバスに、淡路島の特産品が所狭しと描かれている。

ここ「南あわじ市南淡 B&G 海洋センター」は、カヌーやヨットなどさまざまな海洋スポーツを体験できる施設だ。同施設では、利用する人々に親しみをもってもらおうと、カヌーなどを収容する艇庫のシャッターにアートを取り入れることに。そこで白羽の矢が立ったのが、艇庫に近接する南淡中学校の美術部だ。

顧問の佐竹弘衣先生によると、美術部では個人制作を中心にしつつ、年に一度は共同制作に取り組んでいるという。今回のシャッターアートの直前にも、文化発表会のステージを飾る2×6mの絵画作品を仕上げていた。しかし、長さ17mに及ぶ大画面はもちろん初めて。巨大なキャンバスに何を描くかは、部員全員のアイデアをもとに考えた。

「来た人たちが親しみを持ち、記念写真を撮りたくなるようなシャッターアート」というテーマのもと、まずはアイデアスケッチに取りかかる。キーワードは、2017年のユーキャン新語・流行語大賞にも選ばれた「インスタ映え」だ。

地域の魅力を発信

県の内外の人々が利用する施設だ

からこそ、淡路島の魅力を画面いっぱいに描いて伝えたい。部員それぞれが描いて持ち寄ったアイデアスケッチには、淡路島の特産品である玉ねぎやスイセン、レタスなどが並んでいた。それをどう効果的に、「インスタ映え」するように構成するか。

「インスタ映えといえば、ピンクや赤、パステルカラーなどのイメージ。でも、淡路島の最大の魅力である玉ねぎは地味な色合い。玉ねぎをどうやってインスタ映えさせるかは、皆で知恵を絞りました」と語るのは、部長の藤原ももさん。色が難しいのであれば、形を工夫する。鑑賞者がポーズを取ると玉ねぎの皮をむいているように見えるアイデアは、話し合いの中で生まれた。

佐竹先生によると、今回のシャッターアートの制作は、部員が地域の魅力を改めて見つめ直す機会になったという。また、個人制作では抜け落ちがちな「見た人はどう思うか?」という視点をもって制作した作品でもある。見た人に淡路島の魅力が伝わり、そこで記念の1枚を撮りたくなるように。部員たちは常にそれを意識していた。この経験は、今後の制作にも活かされていくことだろう。「また同様の共同制作に取り組んでみたい。自分の視点だけでは生まれないものが、たくさん出てくるから」。藤原さんは、笑顔でそう語ってくれた。



上ノポーズを取って撮影すると、玉ねぎの皮をむいているように見える。
中左ノ部員のアイデアスケッチには地域の特産品が並んだ。
島内には、玉ねぎのUFOキャッチャーがあるとのこと。
中右ノカップを着て、ペンキまみれになりながらの制作。
下ノ個々の作品制作の際も、アドバイスを言い合えるように机をつけて活動する。

教室を飛びだして

TECHTILEワークショップ

山口県山口市にある山口情報芸術センター(以下YCAM)で行われている
TECHTILEワークショップは、「触感」に着目するという
一風変わった試み。その現場に伺いました。



YCAMはメディア・テクノロジーを用いた新しい表現を探索するアートセンター。開館当初から「芸術表現」、「地域」そして「教育」の3分野で多数のプロジェクトを実施している。YCAMが「教育」を活動の軸に据える理由は、昨今のメディア・テクノロジーの進化の中で、子どもたちがメディア・リテラシーを身につけるだけでなく、それらを使いこなして創造力を発揮してほしいと考えているからだ。

TECHTILEワークショップは、教育プログラムの一環として、YCAMが慶應義塾大学と共同で開発したもの。「TECHTILE」は造語で、「TECH nology based tacTILE design」を意味している。触感そのものや、触感に関する技術の研究を行う活動を指すそうだ。スマートフォンなどの電子機器が欠かせなくなりつつある現代だからこそ、身体性のあるリアリティが求められるという考えから、「触感」に注目したワークショップを行っている。

本来、触り心地とは質感など複数の感覚が総合されて感じられるものだが、このワークショップでは、触り心地を「振動」と捉え、専用マイクで採取する。さらに、振動の長さや

強弱を編集できる専用ソフトを使って新しい振動(=触り心地)をつくるというのだ。

ワークショップ会場にはアルミホイールやざる、野球バットなどさまざまな物が用意され、参加した子どもたちは専用マイクを使って、夢中で触り心地を集めていた。そもそも触感を意識して物に触れることが珍しく、「触り心地はこんなに多様なんだなあ」という声も。

好奇心をもった人間を止められるものはない。メディア・テクノロジーを使って、子どもたちの創造力が走り出す未来が楽しみだ。

山口情報芸術センター[YCAM]
<http://www.ycam.jp>
TECHTILE専用ページ
<http://www.techtile.org>



会場に用意された物だけでなく、自分の着ていた洋服から触感を採取する子も。

放課後

第13回

ART